
ROCKMAN BRAVE

あにい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ROCKMAN BRAVE

【Nコード】

N9768I

【作者名】

あにい

【あらすじ】

主人公・明石アキラとパートナーとなったネットナビ・ロックマンとの物語

§ キャラ紹介 §

▲ 明石アキラ

この小説の主人公

今までネットナビを持っていなかったが、ようやくネットナビ【ロックマン・オブ・ブレイブ】を得た

ネットナビがない時でもネットバトルを見たり、本を見たりして知識は持っている様子

兄を目標にしているようだが・・・

▲ ロックマン

正式名称はロックマン・オブ・ブレイブ

アキラの父が作り上げた二体のネットナビの一体

遠距離系の攻撃ロックバスターが初期装備されている

作られて時間が経っていないため、色々アキラに教わったりしている

2

▲ 明石トモヤ

アキラの父親

二体のネットナビを作り上げた

しかし、ロックマン達を作ったのには何か訳があるようで・・・

天本力ホ

アキラのクラスメートの女の子

アキラ・ダイチと共によく行動している

須王ダイチ

アキラのクラスメートの男の子

アキラ同様に行動的で、ネットバトルも得意

タフさと力がウリなパスワードマンと言うネットナビを持つ

パワードマン

ダイチが持つネットナビ
体格はロックマンと比べると大きく、
力と身体の頑丈さは優秀だが、
その分スピードが遅い

第1話：アキラとロックマン

ここは、ネットワーク世界がそれなりに発達した時代。

現実世界とは別に電腦世界と呼ばれているその世界は、もう一つの現実世界のように発展していた。

多くの人は一人に一体・ネットナビというパートナーのような存在を得て、その電腦世界の中で活動をさせていた。

ある者は仕事のため。

ある者は趣味のため。

そして、学校でも深く電腦世界のことについて勉強するようになっていた。

そんな世界の中で始まる物語……。

「父さん！本当にいいの！」

父に呼ばれ父の仕事場にやってきた一人の少年が、大きな声を上げて驚いていた。

「ああ、本当はもう少し早く渡してあげたかったんだが最終調整に時間がかかってしまったね。でも……」

と、少年の父親は携帯ゲーム機のような機械を少年に渡した。

「これがアキラのPETだ。すでにネットナビであるロックマン・オブ・ブレイブは入っている。後はアキラ自身が話してみるといい」

「ありがとう父さん。これで友達の人々と遊べるよ」

喜んでいるアキラ。

彼の名前は明石アキラ。

そして、その父親・明石トモヤ。

トモヤはこの電腦世界を管理し、研究する仕事をやっていた。

「ロックマンか・・・」

「これがPETのマニュアルと特別にロックマンに使うバトルチップもあげるよ」

そう言いアキラに手渡すトモヤ。

「本当にありがとう父さん」

更に喜んでいるアキラ。

「遊ぶのもいいけどちゃんと勉強もやるんだぞ」

「うん！ありがとう父さん」

そう言うアキラは、そのままトモヤの仕事を飛び出していったのだった。

父親であるトモヤからネットナビ・ロックマンが入ったP E Tを貰ったアキラは自宅へと戻ってきた。

「ただいま！」

「アキラ、もしかして・・・」

「うん、父さんの所に行ってたんだ。見て！やっとP E T貰ったんだよ」

そう言い母親にP E Tを見せるアキラ。

「嬉しいのはいいけれどあまりお父さんの仕事の邪魔をしちゃダメよ」

「わかってるよ」

そう告げて自室へと向かうアキラ。

「早くロックマンと話とかしたいけど・・・ちゃんと宿題やっとないと怒られちゃうからな」

と、言う訳で真面目に宿題を始めるアキラ。

しばらくするとトモヤが帰ってきた。

「アキラ、ちゃんと宿題やってたみたいだな」

そう言いながらアキラの部屋に入ってきたトモヤ。

「父さん。うん、ちゃんとやってたよ」

「よし。マニュアル通りにやればロックマンを起動できる。後はあまり夜更かしをしないようにな」

そう告げると部屋を出ていったトモヤ。

「よし・・・今、目覚めさせてやるからなロックマン」

そう言いP E Tの操作を始めるアキラなのであった。

真剣にP E Tの操作をしていたアキラ。

後少して起動できるというところで夕食の時間になり、中断することとなったが夕食後すぐに続きをやり始めた。

「後はこのボタンを押せば登録と起動が出来る・・・それじゃ」

一呼吸おいてボタンを押すアキラ。

と、P E Tの中でじっと動かなかったネットナビ・ロックマンが瞳を開きその身体を動かしたのだった。

「君が、僕のマスターだね」

そう話しかけてきたロックマン。

「うん。俺はアキラ・・・と、ロックマンってさ父さんは長い名前付けてたけど・・・」

アキラがそう言う

「ロックマンでいいよ・・・よろしくねアキラ君」

「ああ、最強のコンビになろうなロックマン」

そんな訳で結構素直なアキラは、父親であるトモヤの言葉を守り早めに就寝するのであった。

- 翌朝 -

「よし、準備オッケー。PETもオッケー」

「アキラ君。PETを学校に持ってもいいの？」

ロックマンが尋ねると

「授業中とかに使ったりしなければオッケーだってさ。昼休みとかはネットバトルやったりするんだ」

そう説明するアキラ。

「ネットバトルか・・・僕はあまり自信ないけど」

「大丈夫。ネットナビをカスタマイズしてサポートするのが俺の役目だからさ」

そう言いながらアキラは学校へ向けて駆けだしていったのであった。

第2話：アキラとロックマンの初バトル（1）

「おはようー!」

元気よく自分のクラスに入っていたアキラ。

「おはよう、アキラ君」

そう言っただけで挨拶してきたのは、アキラと同じクラスの天本カホだった。

「よう、相変わらず元気なやつだな」

そう告げたのは、同じクラスである須王ダイチだった。

「丁度よかった。カホとダイチに最初に見せたかったから」

そう言っただけでアキラは、腰につけていたPETを二人に見せた。

「アキラ君・・・そのPET」

「やっとネットナビもてるようになったのか？」

そう聞くダイチ。

「アキラ君のお父さん、ネット関係の仕事してるんだよね」

そう言うカホ。

「うん・・・」

そう答えるアキラ。

「後でネットナビ同士、挨拶しないとね」

そう告げる力ホ。

「挨拶もいいが、俺としては早速お前のネットナビとネットバトルしてみたいぜ」

ワクワクしながらそう言うダイチ。

「じゃあ昼休みにやろう」

アキラがそう言う

「でも、ネットナビもらったばかりなのにバトルして大丈夫なの？」

ちょっと心配そうな表情をしながらそう言った力ホ。

「何事も経験だしな・・・頑張ろうなロックマン」

そうP.E.T.の中にいるロックマンに告げるアキラなのであった。

「よし・・・」

昼休みにネットバトルをする約束をしたアキラは、しっかりと午前の授業を受けていた。

そして、昼食後。

アキラ達三人はとある場所へと向かっていた。

「やっとネットナビを持ったアキラはここでやるのは初めてだよな」

そう告げるダイチ。

「そうだな・・・」

そう言いながら中に入るアキラ。

この場所はコンピュータ室。

ただし、普通に学校にあるようなパソコンがあるコンピュータ室ではなかった。

ネットナビが今現在子供達の中でも持っている人が増え、学校内にネットバトルが出来る環境が出来始めていた。

そして、この学校もその施設が誕生していたのだった。

「もう何人が来てるな」

ダイチがそう言う一人駆け出すカホ。

「ほら、こっこの場所」

他の人にとられる前に空いているコンピュータの前に移動したカホ。

「ルールとかは知ってるよな？アキラ」

「もちろん！初めてのネットバトルでも負けないからな」

意気込むアキラ。

「それじゃ・・・お互いのP E Tをコンピュータに繋げて・・・ネットナビをこの中に送る・・・それじゃいくぜ」

そしてアキラとダイチは、互いのネットナビをP E Tからコンピュータの中にあるバトルフィールドへと送り出すのであった。

第2話：アキラとロックマンの初バトル（2）

「俺のパートナー・ロックマンだ」

そう告げるアキラ。

「軽く倒してやれ、俺の相棒・パスワードマン」

そう言うダイチ。

「ダイチ君、アキラ君は初めてのバトルなんだから考えてバトルしてあげてよ」

そうダイチに言うカホ。

「問題ないって・・・それじゃアキラからの先攻でいいぜ。どんどん攻めてきな」

余裕たつぷりにそう告げるダイチ。

「よし、ロックマン行こう」

そして、フィールド内のロックマンはパスワードマンと向き合った。

「とりあえずは初めまして・・・と、挨拶した方がいいか？」

そう言ったパスワードマン。

「基本的な事はアキラ君に聞いたけど・・・上手く戦えるかな」

少し自信がない感じのロックマン。

「とりあえずロックバスターを撃つんだ」

アキラの指示を受け、自分の基本攻撃であるロックバスターを放つロックマン。

「受けてやれ、パスワードマン」

「了解」

と、壁のようにどっしりと立ったパスワードマンは、ロックマンのロックバスターをその身体で受け止めていた。

「アキラ君・・・全然効いてないけど・・・」

「今までパスワードマンのバトルは見てきたけど・・・やっぱりタフなネットナビだな」

そう思うアキラなのであった。

「今度はこっちから行くぜ、アキラ。パスワードマン！攻めにいけ」
そう告げたダイチ。

と、振動と共にロックマンに向かって走っていくパスワードマン。

「まともに攻撃を受けたら一撃でやられる。距離をとってロックバスターだロックマン」

そう指示を出すアキラ。

指示を受け後方に下がりながらロックバスターを放つロックマン。

「さっき効かなかったの見てなかったのか？アキラ」

そう言うダイチ。

そして、パワードマンはというとロックバスターなどものともせず突き進むのであった。

第2話：アキラとロックマンの初バトル（3）

「アキラ君、このままじゃやられるよ」

そう告げるロックマン。

「なら、バトルチップで攻めてやる」

と、チップを取り出すアキラ。

「ようやく本格的な攻めだな、アキラ」

そう言うダイチ。

「バトルチップ、キャノン！スロットイン」

と、ロックマンの右腕が変化した。

そして、ロックマンの放った攻撃は爆音を立ててパワードマンに命中したのだった。

「やった・・・命中した」

そう言うロックマン。

「いや・・・パワードマンは」

そう告げるアキラ。

だが、爆煙が消えるとパスワードマンは何事もなかったかのように立っていたのだった。

「パスワードマン、タフすぎるだろ・・・」

そう言うアキラ。

「大丈夫か？パスワードマン」

一応パスワードマン心配するダイチ。

「ああ、少しダメージを受けたが問題ないぜ」

そう答えたパスワードマン。

「よっしゃ、それじゃこっちもそろそろ本気で・・・」

そうダイチが言った時

「そこまでよ！」

と、突然そう告げた力ホ。

「何でだよ・・・ようやくのってきたっていつのに」

不満そうにそう告げるダイチ。

「アキラ君はまだネットバトル初めてなんだし・・・今日はこれぐらいでいいでしょ」

そうダイチにいうカホ。

「仕方ねえな・・・戻れパスワードマン」

P E Tの中にパスワードマンを戻すダイチ。

「お疲れ様、ロックマン」

そして、アキラもロックマンをP E Tへと戻したのであった。

第3話：目指すべき存在（1）

昼休みに初めてのネットバトルを経験したアキラ。

そして、放課後。

「アキラ君！」

と、声をかけてきた力ホ。

「ん？」

「初めてのネットバトルどうだった？」

尋ねる力ホ。

「とりあえず直接やってみてなんとなくはわかった。これから口ツクマンと一緒に色々なバトルが出来るように考えていくよ」

そう言うアキラ。

「まあ、それはそうとだ・・・」

と、やってきたダイチ。

「どうしたんだ？」

「このチラシを見る！」

ダイチが持つてきたのは、街で配られているチラシだった。

「それって・・・」

「この街で一番大きなスタジアムで開かれるネットバトル大会。まだ少し先なんだが、アキラ・・・出てみないか？」

そう聞いてきたダイチ。

「大会って・・・アキラ君はまだ・・・」

「まだ大会まで時間があるっていったら。アキラにはネット研究者の親もいるんだしな・・・それに俺としては大会でお前との勝負をつけたいんだよ」

そう言うダイチ。

「大会か・・・」

そう呟くアキラ。

「とりあえず、考えてみてくれよな」

そう告げるダイチなのであった。

放課後。

カホと共に下校するアキラ。

いつもはダイチも一緒に下校するのだが、大会に向けてか今日は先

に帰っていた。

「カホちゃんは大会出るの？」

「私はどうしようかな・・・アキラ君が出るなら出てもいいけど・・・」

そう告げたカホ。

「俺も一応考えてみる・・・」

「うん、出るなら教えてね」

そして、分かれ道でカホと別れ自宅へと戻ってきたアキラ。

と、すでに父親であるトモヤは帰ってきていた。

「父さん」

「お帰りアキラ」

そして、アキラは初めてネットバトルをしたことをトモヤに話した。

「そうか・・・バトルをするのはいいけどしっかりP E Tとロックマ
ンのメンテナンスとかやるんだぞ」

「うん、大丈夫」

そう言うアキラ。

そして、自室に行きP E Tを机の上に置くアキラ。

「アキラ君・・・さっき話してた大会。僕、勝てるかな」

そう聞くロックマン。

「それはわからないけど・・・大会はネットナビとそれをサポートするパートナーが一つとなって戦っていくんだ」

そう説明するアキラ。

「だから一緒に強くなっていこうロックマン。優勝とかはいきなり無理かもしれないけど一回ぐらいは勝ちたいしさ」

そうロックマンに告げるアキラなのであった。

第3話：目指すべき存在（2）

翌日。

いつものように学校生活を送るアキラ。

そして、父・トモヤもまた仕事で研究室にこもっていた。

そんな中、その仕事場に一人の青年がやってきた。

「お久しぶりです・・・」

そう告げた青年。

「やあ、シンヤ君。久しぶりだね」

仕事場にいた男がそう告げた。

「トモヤさんなら奥の研究室だよ」

「ありがとうございます」

そう言い奥へと向かうシンヤ。

「ん？」

ドアが開く音で振り向くトモヤ。

「お久しぶりです、父さん」

「シンヤ！なんだ、こっちに戻ってきてたのか」

作業を中断してシンヤの元に向かうトモヤ。

「はい」

「この前の大会・・・見事だったな」

そう話すトモヤ。

「父さん・・・今回戻ってきたのは大会等の報告もありますが・・・別の用件があります」

真剣な表情でそう告げたシンヤであった。

「用件か・・・」

そう告げるトモヤ。

「はい・・・父さんが作り上げた二体のネットナビ・・・俺のブルース・オブ・イクス、そしてもう一体ロックマン・オブ・ブレイブ」

そう言うシンヤ。

「父さんは二体のネットナビはいずれ大事な存在になると言っていましたよね」

「ああ・・・未来の事なんて誰にも予想は出来ないが・・・私は何かを感じロックマンとブルースを誕生させた・・・」

そう告げるトモヤ。

「イクスは俺と共に強くなりました・・・だからこそ・・・ブレイブも俺が持ち強くしていきたいのです」

そう言ってきたシンヤ。

「ロックマンのことだが・・・すでにパートナーを得て活動している」

そう静かに告げたトモヤ。

「パートナー・・・まさか・・・アキラにブレイブを？」

驚きながらそう聞くシンヤ。

「そう・・・最近の話だけだな」

トモヤの話を聞き何かを考えるシンヤ。

「わかりました・・・アキラと会ったのも久しぶりですから・・・一度会ってきます」

「シンヤ・・・私の判断は間違っていないと思う・・・今はまだまだかもしれないけれど・・・」

そう告げるトモヤ。

「・・・失礼します」

それだけ告げるとこの場を後にするシンヤなのであった。

第3話：目指すべき存在（3）

放課後。

アキラはロックマンと大会に向けての作戦会議をやる・・・との事で、カホやダイチとは一緒に下校せずに先に帰っていた。

「やっぱり準備しておくチップが重要だよなロックマン」

帰り道、ロックマンにそう言うアキラ。

「張り切ってるねアキラ君。僕は上手く戦えるか心配なんだけど」

そう告げるロックマン。

「大丈夫だって。俺がちゃんとサポートするから。ダイチのパワードマンにだって勝てるようにやるさ」

もの凄いはどのやる気を見せるアキラ。

（そのやる気が空回りしないといいけどな・・・）

内心そんな事を思ってしまったロックマン。

「ただいま！」

元気よく家の中に入っていくアキラ。

「元気良さは相変わらずみたいだな、アキラ」

「えっ・・・」

いきなりそんな声がして、驚いた表情を見せるアキラ。

「兄さん・・・」

「先に父さんに挨拶してきた。また離れる前にお前にも会っていうと待っていた」

そう告げたシンヤ。

「帰ってくるなら連絡してくれば・・・あつ、そうだ！兄さん、俺・・・」

「父さんから聞いている。せっかく久し振りに会ったんだ。少し話さないか」

そんな訳でアキラの自室に入るシンヤとアキラ。

「ロックマンの事も聞いてほしいけど、兄さんの大会の話も聞きたいよ」

そう言うアキラ。

「そのロックマンについてだが、アキラ・・・ロックマンを俺に渡してもらえないか？」

正面からあっさりと告げたシンヤ。

「兄さん・・・何を言って」

「ロックマン・・・俺はブレイブと呼んでいるが・・・俺のイクスと同じ可能性を秘めている。だが、ネットナビを持ったことのないアキラにはブレイブを今のイクスの強さまで育て上げることは無理だ」

そう言い放つシンヤ。

「ロックマンは父さんにもらったネットナビなんだ！だから俺と一緒に強くなっていくんだ、絶対に」

言い方では負けていないアキラ。

「俺とイクスに勝てる・・・そう言いたいのか？アキラ」

そう言うシンヤ。

「兄さんにも兄さんのネットナビにも勝つ！」

そう言い放ったアキラの瞳には、強い決意が宿っていた。

「なら、次の大会・・・勝ち上がってくるんだな」

「次の大会・・・」

「次の大会、優勝者には俺とのエキシビジョンマッチがある。俺と戦い勝つと言うならそこまで来い、アキラ！」

そう言うのと立ち上がり部屋の扉を開くシンヤ。

「大会、エキシビジョンで待つ」

それだけ言い残し、シンヤは部屋を出ていったのであった。

第4話：対面（1）

翌日。

今日は学校も休みということで、アキラは父親・トモヤの研究所にいた。

「どうしたんだアキラ。大会まであと一週間だろ。今朝だって友達が練習に誘いに来ていたのに」

そう言うトモヤ。

「父さん・・・実は・・・」

昨日の出来事をトモヤに話すアキラ。

「なるほど、シンヤが」

「父さん・・・ロックマンと兄さんのブルースって一体どんなネットナビなの？」

そう聞いてきたアキラ。

「・・・アキラ、今日は一日空いているだろう。父さんに付き合わないか？」

自分の質問の答えが知りたかったからなのか、特に間をあげず了承したアキラ。

そしてトモヤは、自分が運転する車にアキラを乗せとある場所に向かった。

「父さんの研究所より大きい・・・」

その研究所の大きさに驚いているアキラ。

「ここは父さんの先生が管理している研究所でね・・・この辺りじや一番大きな研究所さ」

そう説明するトモヤ。

「連絡もよこさずに突然来るのは、変わつとらんの・・・トモヤ君」

と、入り口の自動ドアが開き中から一人の老人が姿を見せた。

「御手洗博士、すみません急に行こうと言うことになりました」

状況を説明するトモヤ。

「その子がよく話に出ていた次男坊か・・・シンヤ君と比べるとトモヤ君に似ているな」

アキラを見ながらそう言った御手洗博士。

「では中に入ろうか・・・すぐに茶を出すからゆっくりしててくれ」

そんなわけで、研究所内の一室でゆっくりりするアキラとトモヤ。

「待たせたな・・・しかし次男坊を連れてきたと言うことはあのネツトナビを持たせたのじゃな」

御手洗博士がそう言うと言くと頷くトモヤ。

「アキラ、ロックマンとブルースは御手洗博士の助言を受けて作ったんだ・・・御手洗博士、シンヤの時のように出来ますか？」

そう聞くトモヤ。

「そうだろうと思って研究員に準備させとるよ・・・」

「ありがとうございます御手洗博士」

お礼を言うトモヤ。

「・・・」

と、そんな二人の会話をじっと聞いていたアキラ。

「自己紹介がまだじゃったな。私は御手洗玄次【みたらいげんじ】。ここの研究長をやっている・・・トモヤ君から話は気いているかも知れんが、私はトモヤ君に色々教えていた・・・今となつては良い研究者になつておるがな」

そう告げる玄次。

「御手洗博士、準備が完了しました」

と、研究員の一人がその事を知らせにやってきた。

「では、行くでしょうか」

そう言い立ち上がる玄次。

「何をやるんだろうね、アキラ君」

そう言うロックマン。

「わからないけど・・・俺達は強くないといけないんだ。兄さんの元に追いつくために」

より強くなることを願い、玄次のあとについて行くアキラなのであった。

第4話：対面（2）

「機械とかコンピューターがいっぱいだ」

案内された部屋に入るなりそう告げたアキラ。

「父さん、兄さんもここで何かやったの？」

「ああ、まあすぐにわかるよ」

そう言うトモヤ。

「ではまず対面といこうか・・・」

と、コンピューターを操作し始めた玄次。

すると目の前のモニターに、ロックマンそっくりのネットナビが映し出された。

「えっ、僕？」

驚くロックマン。

「似てるけど・・・ほんの少しだけ違う」

そう呟くアキラ。

「このネットナビはロックマンじゃよ。アキラ君のロックマンを作る際に基本となったのじゃ」

「じゃあ、俺のロックマンはこのロックマンを元に・・・」

アキラはじつとモニターの中のロックマンを見つめていた。

「後々はネットバトルをやっていくんだけど、アキラは初めてだから協力プレイをやってもらうよ」

そう告げたトモヤ。

「あのロックマンと一緒に戦えるの？」

そう聞くアキラ。

「そう。過去のネットナビだからパートナーはいないけど、バトルチップのデータはインプットしてあるからあのロックマンもチップを使える」

そう説明するトモヤ。

「それじゃロックマン」

「うん、サポートお願いアキラ君」

そう言うロックマン。

「通常のネットバトルをするみたいにモニターに向けてデータを飛ばせば君のロックマンを送り込める」

そう告げる玄次。

「よし、行つてこいロックマン」

そう言い、PETからロックマンをモニターに向けて飛ばすアキラ。

そして、モニターの中のロックマンの隣にアキラのロックマンが出現した。

「それじゃアキラのロックマン。ネットバトルの容量で、僕達が生み出した人工のウィルスを撃退していつてくれ」

そう指示するトモヤ。

「まずは僕がやってみせるから」

そう言う過去データのロックマン。

そして、ロックマン達の前に現れたウィルス達。

それと同時にロックバスターを放ち、ウィルスをデリートしていった。

「凄い。一発も外さずに的確に当てている」

驚いているアキラのロックマン。

「さあ、次は君の番だよ」

そう言った過去のロックマン。

それからしばらく二人のロックマンは、交互に色々試しながらウィルスを全て撃退したのだった。

「ナイスだったぜロックマン。俺の指示なくてもバッチリだったな」
そう言うアキラ。

「あのロックマンのおかげだよ」

「ねえ父さん。あのロックマンにもパートナーっていたんだよね」
そう聞くアキラ。

「資料は全部揃っているぞ。過去ロックマンのパートナーは光熱斗と言う少年じゃ。しかし、同じロックマンの持ち主だから・・・
この熱斗とアキラ君は似ているようじゃな」

そう言う玄次。

「御手洗博士、次の大会まで夜にアキラを連れてきたいのですがよろしいですか？」

そう尋ねるトモヤ。

「父さん・・・」

「アキラ君はやる気みたいじゃからの・・・好きにするといい。研究員に言えばすぐに出来るようにしておくからの」

玄次の言葉に頭を下げるトモヤ。

「あの・・・ありがとうございます」

トモヤを見て、お礼を言い頭を下げるアキラ。

「君の成長を楽しみにしておくとしよう・・・」

そう言う玄次。

「じゃあ今日は帰ろうか。アキラも友達と一緒に練習したいだろうしな」

「うん！ありがとうございます」

そんな訳で満足な表情をして、アキラはトモヤと共に自宅へと戻っていったのだった。

第5話：決意（1）

この日からアキラは、友達との大会へ向けての練習バトル等と共に御手洗玄次の研究所に通いロックマンと一緒に知識と技術を磨いていた。

「アキラ、お前初めてのネットバトルの時よりサポートの動きがよくなってるな」

そう言うダイチ。

「うん、ロックマンもそれに応えて動いてるみたいだし」

そう褒める力水。

「大会で戦うのが楽しみだな、ダイチ」

そう言ったダイチのネットナビ・パスワードマン。

「私だってアキラ君やダイチ君に負けないように頑張るんだから」

そう意気込む力水。

「でだ・・・大会の日も近づいているわけだが・・・大会前日は各自個別特訓しよう」

そう告げたダイチ。

「えっ、何でだよ。今までみたいに三人一緒にやればいいだろ」

そう考えるアキラ。

「アキラ、確かに俺達三人は友達・・・いや親友だ。だけど大会ではライバル・・・勝ち上がるためには蹴落とさなければいけない。それはわかるだろ？」

ダイチがそう言う

「でもさ・・・」

「俺も力ホもお前に勝つために努力する。アキラも個別特訓で俺達の知らないアキラのバトルを見せてみる」

「この前のネットバトルは私が中断させちゃったでしょ。だから大会で戦うなら全力で戦いたいんだと思うよ」

そう告げる力ホ。

「ダイチ・・・」

「よし。今日の特訓はここまでにしようぜ。大会までお互い頑張っている」

そんな訳で今日は解散となり、アキラはすぐに帰宅すると父・トモヤのいる研究所に向かった。

「父さん！」

トモヤのいる部屋に入るなり叫んだアキラ。

「どうしたんだアキラ。慌てているみたいだが・・・」

そう言うトモヤ。

「俺もつと強くなりたい・・・友達よりも・・・そして兄さんよりも」

自分の思いを伝えるアキラ。

「夕食後に御手洗博士の所に行くんだろ。話はそこでしょう」

そんな訳でこの話はあっさりと打ち切られてしまった。

御手洗博士の所に行くまでアキラは、夕食時も強くなると言うことを考えていた。

「ふむ・・・昨日までとは顔つきが違うようじゃが・・・」

そう言う玄次。

「アキラ、先に例の部屋に行ってくれ。御手洗博士と少し話をしたらすぐに向かう」

「うん、わかった父さん」

そう返事するとこの場を後にするアキラ。

「アキラ君の話か？」

そう聞いてきた玄次。

「やっぱり兄弟だと言つことですね・・・アキラもシンヤと同じように・・・」

そう告げるトモヤ。

「あのチップ・・・渡すつもりかの・・・止めはしないが同じ年頃の時のシンヤ君と違ってまだアキラ君には・・・」

玄次がそう言つと

「わかっていますが・・・アキラを信じていますから」

何かを思いそう言つトモヤなのであった。

第5話：決意（2）

例の部屋での特訓を終えたアキラ。

「アキラ君・・・何だか今日は焦った感じがして息が合わなかったけど」

と、PETの中から告げるロックマン。

「俺は・・・」

「アキラ・・・お前に渡したい物がある」

そうアキラに告げたトモヤ。

「渡したい・・・物？」

トモヤの顔を見上げるアキラ。

「これを・・・」

トモヤはアキラに一つの小さなケースを手渡した。

「中に何か・・・」

そう言いながら、ケースを開くアキラ。

するとケースの中には一枚のチップが入っていた。

「父さん・・・このチップ・・・」

アキラがそう言う

「それは通常アキラが使っているバトルチップとは違うんだ・・・それはソウルチップ・・・僕はそう呼んでいる。最も過去のデータを見るとソウルチップは存在しているんだけどね」

そう説明するトモヤ。

「ソウルチップ・・・」

じつとチップを眺めているアキラ。

「それで父さん、このソウルチップって・・・」

「それはロックソウルが宿っているチップ・・・」

「ロックって・・・ロックマン？」

アキラが聞くと頷くトモヤ。

「過去のロックマンのデータを元に、今のロックマンの力になるように作られたチップなんだ・・・それをアキラに・・・」

そう言うトモヤ。

「ありがとう父さん・・・ロックマンをパワーアップ出来るチップか・・・」

喜んでいるアキラ。

「じゃあそろそろ帰るかアキラ」

そう言うトモヤ。

「うん！」

元気よく返事をするアキラ。

「あつ、そうだった・・・今日は御手洗博士から資料をいくつか借りていくんだつた・・・アキラ、しばらく待っていてくれないか」

そう言ったトモヤ。

「わかった、ここでロックマンとお喋りしてるから」

そう告げるアキラ。

そして、この場を出ていったトモヤ。

「ロックソウル・・・どんなのか試してみたいよな、ロックマン」

そう言うアキラ。

「やはりトモヤ君はアキラ君に判断を任せるつもりじゃろうが・・・」

そう言いながら現れた玄次。

「玄次さん・・・」

「シンヤ君も君と同じように自分のナビ専用のソウルチップを受け取ったな」

「兄さんも・・・だから兄さんは強くなったんだな」

そう考えるアキラ。

「それは違うなアキラ君」

「えっ」

玄次の言葉に驚くアキラ。

「断定は出来ぬが・・・シンヤ君はブルースソウルのチップを使っているんじゃないだろう・・・」

「どうしてなんですか？」

尋ねるアキラ。

「君もロックマンとこれからずっと歩んでいけば自ずとわかるが・・・アキラ君とシンヤ君が持つそのチップは強力すぎるのじゃよ」

そう告げた玄次。

「じゃあ兄さんはそのチップが強すぎるのを知って・・・」

「ナビがそのチップの力に負けて飲み込まれれば、暴走の後に消去してしまうじゃろうからな・・・仮にシンヤ君が一度使ったとする

ならば運が良かったのかもしれない」

そう説明する玄次。

「俺とロックマンが強くなれば・・・このチップ使えるようになるんですか？」

尋ねるアキラ。

「そうじゃな・・・アキラ君の頑張り次第じゃな」

そう言う玄次。

「ごめんアキラ、遅くなったね」

資料を車に運び終わったトモヤがアキラの所に戻ってきた。

「御手洗博士もこちらに・・・」

「話の続きはトモヤ君にしてもらおうといい・・・それとアキラ君がある程度成長したらワシとひとバトルしてみたいものじゃな」

玄次がそう言うと

「はい！是非お願いします」

そう返事したアキラ。

「では、帰ろうか。御手洗博士、遅くまですみません」

「かまわんよ・・・しかし君の息子達はワシに期待させてくれるの・・・」

そう呟いた玄次。

そして、ロックソウルと言うチップを手にアキラはトモヤと一緒に自宅へと戻っていくのであった。

第5話：決意（3）

大会に向けての練習と準備を進めていくアキラ達。

そして、大会前日。

アキラは父親のトモヤに連れられて御手洗博士の所で練習していた。

「・・・一応説明はしてあげたようじゃな」

そう告げた玄次。

「シンヤでも扱いにくいチップ・・・今のアキラではまず使いこなせない・・・」

そう言うトモヤ。

「強くなるためのきっかけを与えるとという意味では良いとは思いますが・・・まだ未熟なアキラ君は追いつめられた時・・・」

心配するように言う玄次。

「アキラは・・・大丈夫ですよ」

笑顔を見せてそう言うトモヤ。

そしてこちらは練習をしているアキラ。

本来はまだ早いのであるが、大会前日と言うこともあり過去データ

のロックマンとの練習バトルを行っていた。

「大丈夫か？ロックマン」

自分のロックマンに声をかけるアキラ。

「うん、同じロックマンなのに強いよ」

そう告げるロックマン。

「そろそろ切り上げたらどうだい。明日は大会なんだろ。今日の疲れを明日に残したら全力出せないと思うよ」

と、同室にいた研究員がアキラにそう言った。

「そうだな・・・今日はここまでにしよう。明日・・・よろしくな
ロックマン」

「うん、アキラ君の頑張りに応えられるように・・・」

そう言うロックマン。

そしてロックマンをP.E.Tに戻し、トモヤ達の所へ向かったアキラ。

「やれることはやったか・・・アキラ」

そう聞くトモヤ。

「うん、俺とロックマンで出来る限りのことはしたよ」

そう答えたアキラ。

「明日はエキシビジョンでシンヤも来るからな・・・父さんも応援してるからな」

「ありがとう、父さん」

そう言うアキラ。

と、ここで

「アキラ君・・・」

玄次がアキラに声をかけてきた。

「御手洗博士、色々ありがとうございました」

玄次にお礼を言うアキラ。

「ワシからも明日の大会に出る君に饯別をやるうと思ってな」

そう告げるとアキラに一枚のチップを手渡した玄次。

「御手洗博士・・・そのチップは・・・」

チップを見て何かに気付いたトモヤ。

「この武器は本来ブルース向きじゃがな・・・この数日の練習を見て君とロックマンなら使えると思ってな・・・」

「バトルチップ・・・居合い一閃・・・でも、御手洗博士・・・俺、ソード系のチップは・・・」

そう告げるアキラ。

「心配しなくていいよ。研究所に戻ればあるから・・・アキラがソードを使ってバトルしたいならね」

そう言ったトモヤ。

「うん」

そんな訳で大会前最後の練習を終え、トモヤの研究所に戻ってきたアキラ。

「とりあえずソード系にもいくつかあるから、選んで持っていくといいよ」

そう言って机の上にチップを置いていくトモヤ。

「まだ使ったことないからよくわからないけど、色々持っていてみよう」

並べてある中からいくつか取っていくアキラ。

「じゃ、家に帰るぞアキラ。母さんも待ってるからな」

そして、自宅へ戻りPETとロックマンのメンテナンスを始めるアキラ。

「明日はダイチ達ともバトルするかもしれないんだ・・・万全の状態でいないとな、ロックマン」

「うん、でも本当はソード系のチップを試しておきたかったよね」

そう告げるロックマン。

「ぶつつけ本番になるかもしれないけど、父さんがいうには俺のバトルフォームを知っている相手にはソードは意表を突いて良いかもしれないってさ」

話をしながらメンテナンスを続けていくアキラ。

「よし、完了。じゃあ、あとは明日だ」

「うん、頑張ろうアキラ君」

明日の大会で頑張る事を誓い合い、アキラは明日に備え眠りにつくのであった。

第6話：大会開始（1）

アキラは別に早起きが得意というわけではない。

が、大会当日。

アキラは気持ちよく目覚めていた。

「いつもより早いな・・・でも今日が大会だからって眠れなかったわけじゃないんだけどな」

そう告げるアキラ。

「おはようアキラ君」

と、PETの中からロックマンが話しかけてきた。

「おはようロックマン。うまく行けば兄さんともバトルが出来るんだ・・・」

そう言うアキラ。

「ブルース・オブ・イクス、僕と同じようにアキラ君のお父さんが作ったネットナビか」

何かを思っロックマン。

「ご飯食べたらいち達と合流して一緒に大会の会場に行くからな」

そう言うとりびングに降りていったアキラ。

朝食後、アキラはトモヤに呼ばれて研究所に向かった。

「父さんも母さんを連れて必ず応援に行くからな」

「うん、父さん。俺、絶対優勝して…それから兄さんと戦いたい」

そう告げたアキラ。

「シンヤは全国クラスの大会にも出場経験がある…父さんが知る中で一番強い…」

「それは知ってるよ…それでも俺もネットナビを持ったんだ…だから…」

そう言うアキラ。

「アキラ君、そろそろ待ち合わせの時間だよ」

PETの中からそう告げたロックマン。

「わかったロックマン。それじゃ父さん」

「ああ、頑張れアキラ」

トモヤに見送られ出かけて行ったアキラ。

そして、待ち合わせ場所にアキラが向かうとすでにダイチとカホがやってきていた。

「遅いぞアキラ」

「おはよう、アキラ君」

アキラにそう言うダイチとカホ。

「ごめんって、準備に手間取ったんだ」

そう告げるアキラ。

「じゃあ、行こうぜ。手続きに間に合わなかったら最悪だしな」

そんな訳でアキラ達はバスに乗り大会の会場へと向かった。

同じ頃、街の中にいたシンヤ。

「…だれが勝ちあがって来るのでしょうかね…」

PETの中からそう告げたブルース。

「イクス…俺は相手が誰でも本気でやる…それだけだ」

そう告げるとその足は大会会場の方へ向けて歩きだしていくのだった。

そして、アキラ達は無事に大会会場に辿り着いた。

「それじゃ手続きをしに行きましょう」

すぐさま二人は大会参加の手続きを終わらせ、一息ついた。

「アキラ、この前の決着はここでつけるぜ」

「ああ、俺だってあれからロックマンと練習してきたんだ。絶対に負けない」

「私もいるんだから、忘れないでよね」

二人の会話を聞いてそう言うカホ。

「そう言えば俺もカホとはネットバトルしたこと無かったな…カホはいつも見学ばかりしてたよな」

そう告げるダイチ。

「じゃあ、大会がカホの初バトル？」

「練習ではやってるけど…まあ、大会で当たった時はよろしくね」

笑顔でそういうカホ。

『試合参加者の皆様は、中央広場の方にお集まりください』

そんなアナウンスが会場内に響いた。

「よし、行くぜ」

三人は大会での活躍を意気込み、広場の方に向かっていくのであった。

第6話：大会開始（2）

広場へと到着したアキラ達。

すでにそこには他の参加選手達が集まっていた。

「そんなに大きな大会じゃないしな…これぐらいの人数が普通だな」
そう言うダイチ。

「この中を勝ち上げれば兄さんと…」

そう呟くアキラ。

「二人とも、番号札引いて対戦カードが決まるみたいだよ」

そう言うカホ。

そんな訳で番号札を引き、係りの人に伝えたアキラ達。

「いきなりダイチやカホとあたったりするかな」

「その時はっていうかどこで当たっても全力でだからな」

そう言うダイチ。

そして、大きな電光掲示板にトーナメント表が映し出され参加者達はそれをじっと見ていた。

「俺とダイチは途中で当たるな」

「私は後半のブロックだから二人とあたるとしたら決勝戦だね」

そう言うカホ。

「よし、ロックマン」

「うん、頑張ろうアキラ君」

意気込むアキラとロックマン。

と、アナウンスで一回戦の開始が告げられた。

「とりあえずはこの一回戦を三人とも勝ち上がろうぜ」

ダイチがそう言うのと頷くアキラとカホ。

そして、三人はそれぞれの一回戦のバトルテーブルの方へと向かっていくのであった。

会場で一回戦が開始されている頃…。

「資料の方の調達が終わりました、シンヤ」

そう告げたブルース。

「そうか…特に興味はないが一応はな…」

そう言うシンヤ。

「…シンヤは弟であるアキラと戦いたいのですか？」

「…アキラがこの大会を勝ち抜けるほどに成長していればな…だが、なぜそんな事を聞く？」

そう言ったシンヤ。

「その資料を先程閲覧しまして…大会出場者の中によく知っている名前がありました」

そう答えたブルース。

「イクス…その名前は？」

「ハイツ・グローバル。海外の出身ながら現在は日本に本拠地をおいている…シンヤとも大会では何度も顔を合せています…と、このような説明はシンヤには不用でしたか…」

そう言うブルース。

「ハイツの奴が出場を…あいつ…俺と戦うためだけにか」

「おそらく…というより100%でしょう…シンヤとの対戦成績はシンヤが全勝ですので…」

過去のデータを引っ張り出しながら答えるブルース。

「しかし、この状況でネットバトル初心者のアキラが勝ち上がるのはかなり難しいと…」

「…勝ち上がってこれないならそれはアキラがまだ弱いという証拠だ…俺と本気で戦いたいならアキラは…」

と、モニターで一回戦の様子を眺めるシンヤ。

その後、アキラ達三人は無事に一回戦を突破した。

「カホとはブロック違って離れた場所でやってるから応援とかできないよな」

そう言うアキラ。

「カホは応援なくても強いはずだぜ…俺達の前じゃバトルはやってないけどバトル自体は何度も見てるからな」

そう告げるダイチ。

「順当にいけば次の二回戦に勝って…準々決勝…お前とのバトルになるな」

「二回戦速攻で終わらせてダイチのバトルを見て研究だな、ロックマン」

アキラがそう言う

「駄目だよアキラ君。まずは目の前の事を全力でやらないと…限られた時間の中で僕のメンテナンスもあるんだから」

そう言うロックマン。

「そうだぜアキラ。って、言うか本当は俺がロックマンのデータ収集をやりたいぐらいなんだけどな…まだ情報がないんだし…それより俺との戦いはロックマンを万全にしておけよ…あの時の決着をつけるんだからな」

「おう、任せとけよ」

そして、アキラとダイチはそれぞれ二回戦の戦いの場へと向かっていった。

そして、こちらはもう一つのブロック。

一回戦を終えた力ホは一息ついていた。

「こっちは他のバトルが遅くてまだ二回戦始まらないのか…」

と、モニターを見て隣のブロックの二回戦開始を知る力ホ。

「一人だけど私も頑張らないと…でも…」

可愛らしい表情から少し真剣な表情に変わる力ホ。

「決勝に行く前に…大きな壁が現れたみたいね」

力ホが見ている先には、先程シンヤとブルースの話にあったハイツの姿があつたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9768i/>

ROCKMAN BRAVE

2010年10月8日22時25分発行